

Forex

株式会社 ジャパン
エコノミックパルス
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町
2-33-5
Tel 03-5962-3910
Fax 03-5962-3913
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight

2021年9月13日（月）

ドル高とクロス円の円高、持続と調整焦点

FRB政策と米金利、米中指標、内外感染などにもらむ

今週の為替相場は全般的なドルの底堅さと、クロス円での円高に関して、持続性と反動調整をにらんだ展開が想定される。週間予想はドル/円が109.30-110.60円、ユーロ/円は129.10-130.50円。前週はECBが債券買入の規模縮小を決定する一方、「テーパリングではない」と強調したことなどでユーロ安・ドル高が優勢になった。米経済の減速懸念と米株安が安全逃避通貨のドルと円をサポートしたほか、米FRB緩和縮小観測がドルを下支えしている。今週はFRB政策動向と米金利、米中指標、内外感染動向などが焦点になる。

米10年債金利、13週平均の上抜け重要攻防

今週の為替相場で注目されるのは、9月21-22日のFOMCに向けたFRBの金融政策動向だ。前週末には米ウォールストリート・ジャーナル紙が「FRB、11月の資産購入縮小へ地ならし」と報道。その中では「米当局者の多くは最近のインタビューや講演で、年内に債券買入の縮小（テーパリング）を開始する可能性がある」と述べている。9月21-22日に開催される会合でそれが打ち出される可能性は低いものの、パウエルFRB議長はその次の会合（11月2-3日）で着手する可能性が高いことを示唆するために、9月の会合を利用するかもしれないと伝えた。

今週はFRB幹部の発言が自粛期間入りとなるが、各種報道や米国の経済指標、米国内でのコロナ感染状況などにより、改めて21-22日FOMCでの「緩和縮小地ならし」や「利上げ時期の前倒し地ならし」などが意識されると、全般的にドルの底堅さが支援されやすい。ただしその場合、対ドルでユーロやスイス・フランなどの欧州通貨や、豪ドル、NZドル、カナダ・ドルといった資源国通貨には下落圧力が掛かる。対円（クロス円取引）でも、こうした非ドル通貨の下落と円高の圧力が注視される。

一方で前週には豪州中銀やECBなどが量的緩和縮小を前進させたが、いずれも変異種などのコロナ感染再増加への懸念もあって、今後の緩和縮小ペースには慎重見通しが示された。結果、豪ドルやユーロなどは戻り売り圧力に押されている。ドルに関しても、先行き「FRB緩和縮小の一旦の織り込み」や「その後の慎重なペースでの緩和縮小」が着目されてくると、戻り売り圧力の強まりも意識される。

ただし、豪欧などに続き、各国中銀による緩和縮小「加速」への警戒感が後退していくと、米国株などの世界株や原油などの資源相場は反発となる。その場合、安全逃避通貨であるドルと円は上昇圧力が緩和され、欧州通貨や資源国通貨、新興国通貨は、対ドルと対円で下げ渋りから下限切り上がりに向かう余地も残されている。

為替相場のドル/円では、ドルの行方を左右するのが米10年債金利の動向だ。現在は米国景気の減速懸念などで金利上昇は抑えられているが（債券価格は底堅さ）、FRBによる先行きの債券買入縮小観測や、世界各国の中銀による緩和縮小とカネ余り一服などにより、米10年債金利の下限自体は緩やかに切り上がっている。

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパン
エコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送
は法的に罰せられますのでご注意ください。



〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910 FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂 郁 編集長：原田 祥二

る（米国内外の余剰マネーの米国債滞留が鈍化）。ドル/円でも「ドルの上値は重いが下限は切り上がり」という流れが支援されやすい。

米10年債金利の短中期トレンド判断で参考になる週足テクニカルでは、前週末時点で13週移動平均線1.333%前後の上抜けを巡る重要攻防に直面してきた（前週末10日終値は1.341%）。これから上下動を経ながらも、13週線を上抜け定着できると米債金利の低下圧力が後退。テクニカルでの13週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンドでは、バンド上限が現状1.495%前後に位置している。まずは同レベル方向への金利上昇余地と、連動したドル/円のレンジ上方修正が注目されそうだ。その他の注目ポイントは以下の通り。

<ドル/円の週足、基準線や30週線などの維持焦点>

為替相場の短中期トレンド判断で参考になるのが週足テクニカルだ。ドル/円の週足では13日アジア市場時点レートでドル下値メドとして、一目均衡表の転換線109.76円前後、基準線109.57円前後、30週移動平均線109.56円前後、200週移動平均線108.77円前後、40週移動平均線108.22円前後などが意識される。

各ラインともトレンド方向を示す方向角度は、上向き化や横這いを保ったままだ。各ラインの上向き化や横這いが維持されている限りは、一時的なドル安と下抜け場面があっても、早期の上抜け回復が支援されやすい。反対に各ラインを下抜けたあと、下抜けの滞留時間が長くなったり、各ラインの方向角度が下向きに転換してくると、ドル安リスクが増大。各ラインなどを上値メドとした戻り売り圧力の強まりと、下値模索方向へのトレンド転換が後押しされる余地も残されている。

一方で週足でのドルの上値メドは、13週移動平均線110.14円前後、330週移動平均線110.50円前後、8月13日週の高値110.80円前後、360週移動平均線111.20円前後などとなっている。

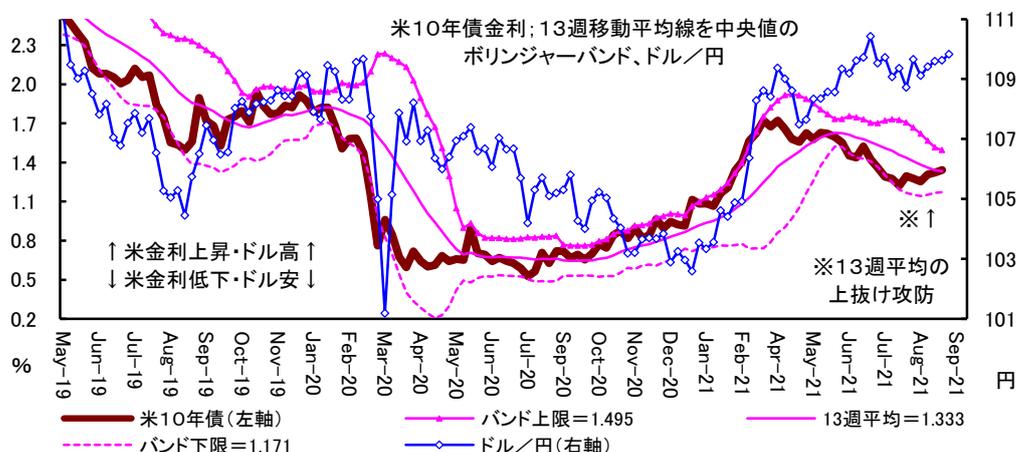
<米中の経済指標>

今週の米国市場では重要指標が相次ぐ。最近の米指標はデルタ変異種などによるコロナ感染再増加もあり、下振れが目立っている。今週以降も低迷が続くと改めて米国経済の減速が懸念され、短期的にドル安や米国の株安とリスク回避の円高に振れやすい。今週は中国の指標も予定されているが、中国では企業に対する規制強化や不動産などの引き締め強化策、素原材料価格や物価の上昇、半導体などの品不足もあり、景気減速が警戒されている。

一方で米国の場合、14日のCPI（消費者物価指数）や15日の輸入物価指数では、根強い供給制約や品不足などで物価の高止まりが示される可能性がある。FRBによる緩和縮小を後押しさせ、ドル高材料となる可能性もある。また、米中の指標については減速懸念が高まっているだけに、少しでも打たれ強さが示されるとサプライズに作用。ドル高やリスク選好の円安を促す余地も無視できない。

<米国の追加財政出動を巡る動向>

米与党・民主党の一部上院議員は12日、バイデン大統領による国内の政策課題



に3.5兆ドルを投じる歳出法案について、党指導部が設定した9月27日の期限までに可決される可能性は低いとの見方を示した。最大1.5兆ドルのより小規模な法案なら、支持する用意もあるとしている（ロイター通信）。

民主党のペロシ下院議長は、9月27日に1兆ドルの超党派インフラ法案の採決を行う方針を示している。バイデン大統領とペロシ氏は、インフラ法案と歳出法案を同時に可決する狙いだったが、党の中道派下院議員はこれに反対し、インフラ法案を先に採決するよう要求した。ロイターでは「このため歳出法案の採決は先送りされる可能性がある」と伝えている。

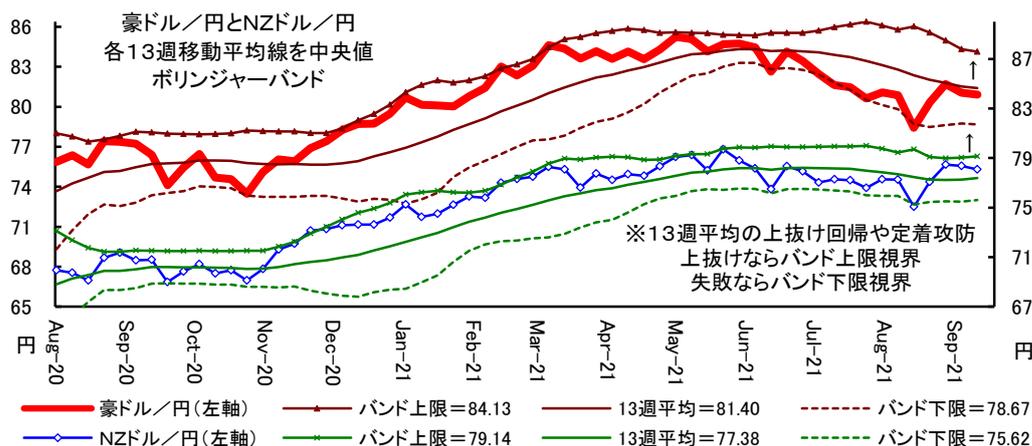
今後、米国の追加財政出動に関し、難航や減額の懸念が一段と強まるようなら、ドル安や米株安とリスク回避の円高を招く可能性がある。反対に難航打破となれば、ドル高と米株高、円安を促す展開も注視されそうだ。

＜クロス円の週足、13週線の回復や上抜け定着の攻防＞

為替相場の短中期トレンド判断で、参考になるのが週足テクニカルだ。主要クロス円取引では6月以降の外貨安・円高を経て、8月後半からは外貨安の一服や反発が焦点になってきた（円は反落）。

週足テクニカルでは目先、13週移動平均線を巡る攻防が注視される。13週移動平均線を中央値としたボリンジャーバンドでは、13週線を回復や上抜け定着できるとバンド上限が週間ベースでの上値メドとして視界に入っていく。13週線を下値メドとした押し目買いと下限切り上がりトレンドへの回帰が見込まれる。

反対に13週線に上値を抑えられたり、13週線を再び下抜けていくと、改めて下値リスクが増大。バンド下限方向が下値メドとして意識されそうだ。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。